

源流人会活動報告

4月13日(日) 源流学の森づくり



▲炭焼きで温度を測っているところ
炭焼きで温度を測っているところ。さらには辻谷館長のチェンソー講座もあって、濃い一日になりました。

さつそく、先日仕込んでおいた炭窯の蓋を取ってみたところ・・・残念、半焼けでした。というところで、炭窯に再度火を入れ、焼き直しつつ、傍らでシイタケのほだ木を準備。さらには辻谷館長のチェンソー講座もあって、濃い一日になりました。



▲チェーンソーはこうやって・・・



▲リョウブの新芽
※この日の炭を後日スタッフが取り出しにいったところよく焼けていました。

1月17日(日) 源流人会新年会

源流人会新年会1発目の企画として、お楽しみ企画の新年会を行いました。この日は、日差しは暖かかったのですが、少し前までの残り雪で源流の宿へは行けず、水源地の森管理棟付近の河原で行いました。いつもお手伝っていたらいいな。

「川上村万年青年会」のみならずにも来ていただきました。まずは河原で火を起こします。たき火があるだけでも暖かく感じます。その後、各自で持ちよった食べきれないくらいのご馳走をいただきながらワイワイと楽しみました。ちなみにスタッフは豚汁を現地で作ったのでした。また、辻谷館長から提供のシリブカガシを煎って食べるとこれが美味で人気でした。



▲シリブカガシ



▲たき火であたたまりながら・・・



▲雪の残る水源地の森

リーチの後、なかなかピンゴが来ずに7リーチなんて人もいましたね。最後にまだ雪の残る水源地の森へ。キリッとした空気の水源地の森をほんの少しだけ感じ帰路につきました。

本の紹介

川上村民俗調査報告書 (上巻) 発行

森と水の源流館では、奈良県内外の民俗研究の専門家のご協力を得て、山村の暮らしや年中行事、信仰、風習などを集落ごとに聞き取る調査を行ってきました。

そして、14集落の結果をまとめた『川上村民俗調査報告書』(上巻)を昨年5月に発行しました。隣どつしの集落でも、谷筋を隔てること違う風習や呼び方になるなど、なかなか興味深い内容です。この報告書は、森と水の源流館、川上村図書館で閲覧いただけるほか、奈良県内市町村の図書館、全国都道府県立の図書館ほかに寄贈いたしております。お問い合わせください。(販売、配布はいたしてありません)



ぼたたい

源流のひとしづく
春 第17号 増ページ号

ぼたたい 源流のひとしづく 第17号 発行日 平成21年3月発行
発行所 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館 TEL 0746-52-0888

CONTENTS

- ・コラム
- ・山が病院だった
- ・吉野川・紀の川流域の遺跡 その6
- ・源流の主役たち
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・朝拝式に行ってきました
- ・源流人会活動報告

森と水の源流館

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746-52-0888
FAX 0746-52-0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

水源地の森守募金にご協力ください

お寄せいただいた募金は、水源環境向上の一環として、斜面崩壊地での土砂流出防止の木柵設置事業「芽吹きの皆プロジェクト」などに役立てます。

毎年9月の第二日曜日は「水源地の森守募金」の日。「水源地」を守り伝えてゆくための活動を盛上げてゆきましょう。組み立て式の募金箱を配布しています。

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

源流人会募金

源流人とはかけがえのない水を生かす源流の自然を愛し、源流を守り、育ててゆくことです。

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆくことです。

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

■表紙の写真「トチノキの新緑」

「望郷の碑」の除幕式

森と水の源流館 坂口泰一

川上村では、平成19年度の事業で大滝ダムサイトに「望郷の碑」を整備し、平成20年5月18日にその除幕式典を行いました。

「望郷の碑」は、川上村が進める「水源地の村づくり」の一環で、この場所が将来にわたって源流と下流域の交流の場となることを願って整備しました。

吉野川は、正式名称は紀の川と言うのですが、奈良県では吉野川と呼ぶのが一般的でありその呼び名に愛着を持っています。また、大川（おおかわ）と呼ぶのが普通でした。集落を流れ大川に注ぐ川を小川（こがわ）とも言っていました。そして、その川と共に大きくなっていったのが少年時代でした。

私だけでなく、多くの諸先輩方や後輩たちがそうであったと思います。

辻谷館長が「山が学校だった」の本を以前出版されましたが、「川が学校だった」と思う人たちも多いと思います。

私も文才があれば本を書くのですが、川でいるんなことを学んだように思います。

とは言っても、夏休みに水泳、ハイジャコ（アブラハヤ）釣りから鮎の友釣り、うなぎ釣り等々までをして、遊んでいた



▲ 望郷の碑

だけでも。

そのときに、もう少し興味を持って、魚のえさとなる水生生物の観察をしたり、生態系を学んだりしておけばよかったと思っています。

御勢久右衛門先生が生前おっしゃっていた中で、「水生昆虫が瀬を朝には上って、なぜかは分からないが、夕方また流れ下るようだ。それを魚は知っていて、待ち構えて捕食する。」という話を思い出します。



▲ 吉野川思い出発掘調査隊(平成16年)

初めて泳げたとき、高いところから飛び込めたとき、大物を釣ったときや逃がしたときのドキドキは今も鮮明に残っています。

そんな吉野川の思い出を残すために、平成16年から「吉野川思い出発掘調査隊」と名づけて、川を歩きながら地元の人たちに思い出を聞いて記録しました。

尾上次長が中心となって、吉野川を数ブロックに分け、ワークショップを行いました。

自分の知らない上流域の昔からの川の様子が、分かって面白かったのを思い出します。

そんな吉野川の思い出を、次世代に語り継ぎ、また思い出してもらいながら、大滝ダムの役割や川上村の想いを表現していく場として「望郷の碑」とそれにつながる「吉野川思い出の広場」として整備していくことにしています。

これから、ダムサイトに近づくことができるようになるし、年々大滝ダムサイトは変化していきます。毎年この場に集まってもらえるような催しができれば、と、頭の中を思いが駆け巡っています。



▲ 吉野川（丹生川上神社上社跡付近水没予定地）



▲ 大滝ダム

平成21年5月17日（日）「望郷の碑」周辺で「第2回源流まつり」を開催！

朝拝式に行ってきました

朝拝式は、非業の死を遂げられた後南朝の天王、自天王（尊秀王）を偲び、毎年、即位の儀式が行われた2月5日に行われています。

朝拝式は、数年前から家内が一度拝見したいと言っており、また、たまたま私の誕生日と同じということから興味を持っていました。そして、平成19年の550年祭を契機に誰でも参加できるようにしたのを知り、今回思いきって行くことにしました。教育委員会へ問い合わせをすると、朝10時から儀式が始まること、北和田地区のふれあいセンターから送迎してもらえること等を教えていただき、「ぜひお待ちしております」との声をかけてもらいました。



▲ 朝拝式の様子



▲ 自天王遺品の甲冑

当日、暗いうちから出発し、川上村へ向かいました。無事、森と水の源流館の木村さんとも会い、9時前に北和田のふれあいセンターに到着。そこからはシャトルバスで金剛寺へ。まず、受付で記帳し、時間までしばらく会場付近をうろろろ。10時に自天王を祀る自天王神社で儀式が始まるというのを聞き、少し前にその場所へ待ちました。遠くから来る方々に儀式を見やすくするため、幕を上げる等の配慮もしていただきました。しかし、10時になっても、一向に始まる様子もなく、特に初めて来た我々はこんなものかと待っておりましたが、村の人たちや来賓の方々は、「何をしているのか」、「袴がうまく着られないのでは」など、やきもきしておられました。

待つことおよそ30分、支度が終わったのかようやく朝拝殿から袴をまとった立衆が急な階段を上ってきて、いよいよ儀式の始まりです。まずは、自天王神社前の儀が行われました。年に一度の行事。自分の役割は分かっているけど、たぶん慣れないこともあり最初は少し戸惑うといった感じ。全員お祓いを受けた後、



▲ 自天王陵（河野宮墓）への参拝

お供え物を次々と祭壇に運び、祭文を奉誦、玉串奉奠。続いて、御朝拝の儀が宝物殿前で行われました。宝物殿前では、立衆は喋らぬように言うことなのか、息がかからぬようにと言うことなのか、榊の葉を口にくわえての整列です。宝物殿の扉が開けられ、自天王の遺品である鎧、兜等が現れました。これらの遺品は国の重要文化財として保存されている物です。賀詞が奏上され、そして、玉串の拝礼。この拝礼には、一般の我々も参加させていただきました。鎧に編みこまれた朱色の糸が印象に残りました。

そして最後に、御陵参拝の儀です。この御陵は、宮内庁管轄の河野宮（自天王の弟、忠義王）墓とされており、中に入るときには宮内庁の職員立会いで、身を清めてからでないといふことができません。この日も口をすすいで入りました。ここでは一同が拝礼し、誄文を奉誦しました。外での儀式が終わり、金剛寺本堂前で関係者らの記念撮影。そして、朝拝殿



▲ 朝拝殿内の自天王像

の儀が朝拝殿で行われました。朝拝殿の儀は由来記の奉誦があったようです。私たちは、朝拝殿までは入れなかったのですが、中の様子までは分かりません。

儀式が終わり、「公民館に少し虫養い（腹の虫が治まる程度の軽い食べ物）を準備しているの、休んで行ってください」とのこと。お言葉に甘えて寄ってみました。柿の葉寿司と温かい豚汁にお茶を用意していただけており、丁度12時でお腹も空いていたので、本当にありがたかったです。頂戴いたしました。部屋に集まった方々は川上村の歴史に大いに興味のある方々で、柿の葉寿司やみさき寿司の話でも、盛り上がりました。

伝統行事を続けていくのは大変なことだろうと思いますが、若い方が参加しておられる姿を見て嬉しく思いました。川上村を訪れていつも思うのは、村の方達のやさしさです。今回もその思いをあらたにしました。ますます川上村にひかれそうです。

村の皆様ありがとうございました。

辻井了兌彦（源流人会会員）

ショックでしたが、大和上市駅前前の吉野川の河原にはかなり広がっているようです。川上村でも最近見かけるようになってきたので、注意していかなければと思います。

最後になりましたが、楽しい観察を指導していただいた井上龍一さん、井手泉さん、真下辰一さん、ありがとうございます。

「バッタコンクニク」報告

【日程】10月26日(日)

【場所】和歌山市水と

きらめき紀の川館とその周辺

この日は朝からあいにくの雨。午前中は水ときらめき紀の川館の中で講師の河合正人さん(元あやめ池遊園地自然博物館学芸員)による「バッタの授業」とシユロの葉を使ったバッタづくりを行いました。「バッタの授業」ではスライドを使いながら主に河原で見られるバッタを説明してもらいました。シユロの葉で作るバッタには参加者の皆さん、悪戦苦闘し

ながらも、河合さんに教えてもらいながらも完成させました。

午後からは、少し天候が回復したので、実際に河原へ出てバッタやコオロギ、キリギリスの採集。雨で気温が下がり、バッタの活性が悪く、最初はなかなかバッタが姿を現しませんでしたが、参加した子どもたちの活躍で、だんだんと姿を現すバッタたち。さらに、姿の見えない鳴く虫たちの解説も河合さんにしてもらいながら、さらに採集。こうして見つかったバッタ・コオロギ・キリギリスを河合さんに見てもらった結果、合計11種類いました。余談ですが、ここでも河原に特定外来生物のナルトサワギクが繁殖していました。きれいな花ですが、繁殖力の強さに圧倒されました。特定外来生物はきれいだからと採集して帰ると罪になりますので注意が必要です。違反内容によっては非常に重い罰則が課せられます。

採集が終わると、それぞれの種類について解説してもらい、「バッタリンピック」へ。バッタリンピックとは「バッタ+オリンピック」の短縮形で文字通り、バッタのオリンピックです。バッタの種類ごとに分けて、バッタの飛び距離を

競います。この日はなかなかバッタが飛んでくれず、最高でもトノサマバッタの9m40cm。バッタではありませんでしたので参考記録となりましたが、ホシササキが13mの大ジャンプを見せてくれました。河合さんによるとホシササキは主に夜行性なので、昼にこれだけ活発に飛んだのは面白いとのことでした。最後に水ときらめき紀の川館に戻り、表彰式を行い、河合さんからバッタメダルと表彰状の授与がありました。

最後になりましたが、河合正人さんには楽しい観察会を指導していただきまして、水ときらめき紀の川館の早田孝昭館長はじめ職員の方々に会場提供をはじめ、色々とお世話になりました。また、源流人会の古川雅史さん、太田勝弘さんには行事のお手伝いをしていただきまして、この場をお借りして御礼申し上げます。

当日の記録

シユウリョウバッタ、オンブバッタ、トノサマバッタ、ツチイナゴ、クビキリギス、ナミツユムシ、ホシササキ、シバズ、マダラスズ、エンマコオロギ、ツツレサセコオロギ(以上11種)



▲ オンブバッタ



▲ ショウリョウバッタ (交尾中) ※



▲ トノサマバッタ (交尾中) ※



▲ ツチイナゴ ※



▲ クビキリギス (終齢) ※



▲ ホシササキ ※



▲ ナルトサワギク



▲ バッタを発射台にセットしています

※写真：河合正人氏撮影。

山が病院だった



辻谷 達雄



わしは昭和8年(1933年)7月生まれで、現在75歳と8ヶ月である。生まれた所は、現住所の川上村柏木の集落で一番高い上坊で、杉の木が家の真上に覆い被さるようになっている。山村そのものである。75歳のこの年まで、何の大病も患わず、一度の入院経験もなく、健康で生きてこられたのが山のおかげであったことは論を待たない事実である。幸いかな、わしは学校を出てからすぐ山の仕事に従事し、60年間、山と関わってきた。これからも、この命は尽きるまで、山で暮らすつもりである。

人と森との関わりをみると、大昔から人間は、森の中で鳥や獣を狩り、アケビやサルナシ等の果実を取り、木の実を集め、川で魚を捕って生活していた。山は居住の場であり、生活物資の供給源であった。また、病氣や怪我を良くする病院や薬局の代わりの場所でもあった。森を中心とした緑がない所では、人間の生活もありえなかつたと考えられる。人間が地球に現れて以来、現在に至るまでの歴史の99%以上は森を中心とした緑の中の生活であり、長い間の生活経験によって、人は森の緑を求める感覚が養われてきたと思われ。人が森の緑に対して、穏やかさ、安心感、生きている実感等を得るのは、人間本来の姿であったと考えられる。しかし、現代社会においては、産業、交通、科学等の発達により、都市に多くの人が住み、仕事をし、生活するようになつたため、森と触れ合う機会が少なくなり、逆に自然を求める意識が高まつてきたように思う。これも人間がずっと持ち続けてきた願望であると思う。



▲ 自宅裏はスギ林だ

最近よく耳にする言葉に森林セラピーというものがある。森林浴や、癒し、安らぎなど、森林の効用を医学的に分析する研究が方々でされている。わしは、そのような難しいことは解らないが、75年間山から受けた効用の数々を思い出しながら記していくことにする。

山の空気が、水のきれいさや、四季の移り変わりは、昔も今もあまり変わらないが、文明の進化とともに、病気の数が増えてきている。反面、わしが子供の頃の病気で、今はなくなっている病気もある。その中でも田舎の子供に特に多かったのは、腹の中に湧く回虫である。それを駆除する方法として、薬局で海人草を買い、煎じてよく飲んだ。別名、マクリといつて、非常に苦い薬であった。この薬も度々飲んでいると効かなくなつてくるので、海人草の中にホオズキやザクロの根を入れ、煎じて飲んだ。実に苦みが増すので、すぐに水を飲んだものである。あの時の苦さは、半世紀経つた今もよく覚えている。今と違って食べる物があまりなかったもので、どの家庭でも畑を耕して野菜等をたくさん作っていた。その肥料として人糞を畑に撒いていた。当時の便所は水洗ではなく、属に言うポットン便所であったので、回虫の卵が野菜などに付いたまま食べられていたのが当時よく回虫が湧いた原因と考えられる。現在、畑には全部科学肥料を施している。回虫を湧かす子供はいなくなつた。これは昔あって、今なくなった病気の一例である。

現在は、逆に昔はなかつた病気が増えてきている。その一つに花粉症がある。特に、杉による花粉症が多い。この病気は、わしにはどうしても理解できない。理由として、杉山のそばで75年間暮らしてきたわしがなんでもないので、東京や大阪の都市に住んでいる人がまだ春にもなっていないのに花粉症にかかっているし、最近、田舎に住んでいてもかかっている人がいる。杉花粉が病原体の全てだったら、わしは全国で一番先に花粉症にかかっていると思うが、未だ全然その気配がないところを見ると、他に原因があるのか？はたまた、杉の木との長年のつきあいの中で仲良しになっているのか？花粉を受け付けない体になっているのか？毎年3〜4月頃、山でメンツを広げて弁当を食べていると、メンツの飯やおかずの上に花粉がふりかかる。まるで花粉のふりかけ飯である。それを60年以上食べてきたのに？花粉症で悩んでいる人達よ、杉山に入って、杉と仲良しになることを希望する。ハハハ……。

わしは今でも市販の薬は飲まないことにしているが、今唯一飲んでる医者の薬がある。3年前に軽い脳梗塞を患ってから毎朝1錠、血を固まりにくく、血液の流れを良くする薬だけ飲んでいる。他の病気には山で採取した薬草等を食べたり飲んだりしている。この民



▲ スギの雄花

間業という治療は、民間人よって、民間伝承による経験に基づいて行われてきた。わしも、親や先人達に教えてもらい、自分で試した経験に基づいた民間業の一部を紹介する。

今まで飲んだり食べたりした中で一番の即効薬はハビ（ニホンマムシ）である。ハビの仲間だが、ハビは他と比べると短い。平均50cmくらいで、細いほうである。特徴は、頭が三角形になっていて、皮の模様がマムシグサによく似ている。口にあるキバには猛毒があり、咬まれると人間でも命を落とすことがある。ハビを生きたまま捕獲するには高度かつ独特な技術が必要である。生きたまま捕獲したハビを、水を半分くらい入れたペットボトルの中に入れる。その時、ペットボトルの蓋に息ができるように小さい穴を空けておく。そして約2週間、毎日水を換え、ハビの体内の汚物を全部外に吐かせてしまう。水がきれいになったところで、ペットボトルからアルコールの入った瓶に入れ替える。ハビは1ヶ月経っても元気である。瓶に入れ替える時には一番苦労する。ちなみにわしは35℃の焼酎に漬ける。すぐに封をして完全に密閉



し、瓶の外側に年月日を書き、一般的には土の中に埋めて10年そのまま放っておくと、ハビのエキスが焼酎の中に溶け込む。わしは埋めた場所を忘れたらあかんで、小屋の床下の暗い所へ置く。

ハビ焼酎は昔から万病に効くと言われているくらい効能の高い薬である。わしの場合、風邪気味かなと感じた時、夜寝る前にさかすきに一杯飲んでおくと、翌朝にはすっきりしている。しかし、飲む時が大変で、ちよつと口では言い表せないような臭いが鼻をつく。良薬は口に苦しと言うが、そんなものではない。肺結核の三期でも治つたと言われるくらい良く効いた。わしが実際に経験した、今37歳になる三男が赤子の時のことである。風邪をこじらせて呼吸困難になった時、ハビ焼酎を沸かして喉に湿布すると、たちまち熱が下がりが良くなった。これにはさすがのわしもただただ驚いた。これくらい即効性のある薬に出合ったのは初めてであった。

他にも、一度干したハビの皮を湯で戻して骨折の時や扁桃腺の熱とりなどに使った。子供の時母親に良く貼られたものである。



▲ マムシ酒

ハビは危険なので、わしは見つけたら生け捕るか、またはその場で殺して皮を剥ぎ、家に持ち帰る。身のほうは焼いて食べる。これがまた栄養になり、おいしい食べ物である。皮は新聞紙を小さく丸めてさし、乾かしておく。このように、ハビは捨てることなく全部薬になる。ハビを料理するようになって分かったことであるが、ハビは他のヘビと違って卵から孵るのではなく、子供を産む（卵胎生）。そんなことはどうでもよいが、民間業はまだまだたくさんあるので、今回はこの辺で切り、次回に紹介することにする。



つづく

の道を観察しながら登って行きました。道中は水がしみ出している土手や崖があり、コケも豊富です。アオキやシヤクナゲの葉上には葉つぼの上に生える葉上ゴケとして知られるカビゴケが独特の匂いを漂わせて、たくさん着いています。カビゴケは環境省のレッドリストでは準絶滅危惧種に指定されており、生育には清涼な大気環境が必要ことから指標性も示唆されている植物です。こういった種がたくさん見られる環境というのは今後に残って欲しいものです。コケの観察を続けながらも何とか蜻蛉の滝の雄姿を見ることができました。観察はもう少し続けました。結局35種観察できました。今後も続けて、誰でも使える「蜻蛉の滝コケガイドブック」が作れたらいいなあとたくらんでおります。たくらみに参加したい方、お待ちしています。

【蜻蛉の滝で観察されたコケ植物】

【藓類】

スギコケ科 コスギコケ、ホウオウコケ科 ホウオウコケ、ナガサキホウオウコケ、シッポコケ科 カモジコケ、シラガコケ科 ホソバオキナゴケ、オオシラガコケ、カ



▲ フタバネゼニゴケ (どこでもゼニゴケの仲間はきらわれ者ですね)

タシロコケ科 カタシロコケ、センボンコケ科 チユウコケ、ネジクチコケ、ヒナノハイコケ科 サヤコケ、ハリガネコケ科 ヤマハリガネコケ、チヨウチンコケ科 コツボコケ、コバノチヨウチンコケ、ヒノキコケ科 ヒノキコケ、タマコケ科 コツクシサコケ、タマコケ、タチヒダコケ科 コダマコケ、ヒジキコケ科 ヒジキコケ、ハイヒモコケ科 キヨスミイトコケ、オオトラノオコケ科 オオトラノオコケ、トラノオコケ科 ヒメコケ科、アブラコケ科 アブラコケ科、クジャクコケ科、クジャクコケ科、シノブコケ科 アオシノブコケ、トヤマシノブコケ、ツヤコケ科 ヒロハツヤコケ、サナダコケ科 オオサナダコケ、モドキナガハシコケ科 カガミコケ、コモチイトコケ、ハイゴケ科 ヒメハイゴケ、イワダレゴケ科 フトリユウビゴケ

【苔類】

ムチコケ科 コムチコケ、ムチコケ、クサリコケ科 カビコケ、フルノコケ、ゼニゴケ科 フタバネゼニゴケ

カエルの観察会

【日程】2008年6月14日(土)

【場所】奈良県吉野郡吉野町

近鉄大和上市駅北側

この日は天気も良く、初夏の強い日差しが照りつける中、26名の参加者を集め開催しました。講師は井上龍一さん、井手泉さん、真下辰一さんのお三方にお願いしました。最初に大和上市駅で受付の後、井上さんによるカエルの授業



▲ ニホンアマガエル



▲ トノサマガエル

を行いました。人形を使ったわかりやすい授業で「カエル」という生き物を「カエルの前足の指は何本？」とみんなで考えながら学んでいきます。この後随所でいろんなぬいぐるみが登場していききました。上市駅の裏手に進み、まずはミイラになったアカガエルを発見。さい先は良さそうです。その後道ばたの植物などを観察しながら田んぼの方に向かいました。田んぼが近くなるとニホンアマガエル、トノサマガエル、ツチガエル、ヌマガエルといった田んぼの代表的なカエルがいろいろ登場しました。これらの種は吉野

川源流部にあたる川上村では観察できない種ばかりです。また、シマヘビも登場。用水路ではニホンイモリ（アカハライモリ）も観察できました。吉野川流域のニホンイモリの腹はとてむぎつい赤色なのですが、この辺りの集団はオレンジ系の赤色と遺伝的な集団差も見られました。少し山の方に入ると、放棄水田のガマの葉にシュレーゲルアオガエルを発見。この種は川上村でも観察できる山のカエルです。葉つぼの上で絶妙のポーズとり参加者を楽しませてくれました。カエルばかりではなく、さわるとかぶれるウルシの仲間のヤマハゼ、クリの花、足が4本に見えるヒカゲチヨウなどいろいろな生き物も観察していききました。特定外来種のおオキケンイグクが石垣できれいな花を咲かしていたのがちよつと



▲ ヌマガエル (左) と ツチガエル (右)



▲ シュレーゲルアオガエル



▲ シマヘビ

吉野川・紀の川流域の遺跡～その6～

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

一字一石経塚 ナメキ遺跡の石塔

白川渡地区の明光寺に「一字一石/寛政十戊午(1798年)/三月廿一日/願主/下多古村/白雲山/龍泉寺沙門理應/敬白」と刻まれた石塔が立っています。

この石塔は、もともと吉野川岸の「ナメキ」という山林にあった経塚に建てられていたものです。「ナメキ」には他にも「宝暦元年(1751年)/義圓法師/未/十二月四日(基礎部のみ 国道169号線沿いに移転)と刻まれたものや、「法界塔」「天明二年(1782年)」(下多古の龍泉寺に移築)などと刻まれた石塔がありました。

なぜ、吉野川岸の山林にこのような石塔が立てられていたのでしょうか。かつて「ナメキ」には江戸時代の延宝年間(1673～81年)まで村があり、後に白川渡と下多古に移転したと伝えられています。

龍泉寺に移された「法界塔」にある「法界」という言葉には「この世をさまよひ災害を引き起こす霊」という意味もあり、この霊を鎮めるため、村外れで供養が行われることがありました。

石塔の年号を見ると、石塔が立てられ始めたのは、村の移転から数十年も経ったあとになります。また大滝ダム建設に伴う「ナメキ」の発掘調査(1986年)では、橋脚跡や文字を記した石、灯明皿や古銭などが見つかり、村が移ったあとも、石塔を建て、経塚を造営するなど地域の人たちの信仰の場として大切に扱われていた様子が伺われます。

現在、「ナメキ」はダムの水没地となり当時の面影は残っていませんが、国道沿いに新しい供養碑と由緒を記した石碑が立てられ、いまでも大切に祀られています。



▲ 明光寺の一字一石塔



▲ 龍泉寺の法界塔



▲ ナメキ遺跡の現状(国道沿いの新しい供養塔)

参考文献

日本石仏協会編『日本石仏図典』1986年 国書刊行会
『川上村民俗学術調査報告書 白川渡地区』昭和61年 川上村教育委員会

蜻蛉の滝ナメキポイント(その1)

日程：2008年4月5日(土)
場所：奈良県吉野郡川上村西河、蜻蛉の滝公園

今年度から始まったしらべ隊。毎回、吉野川・紀ノ川流域の自然を調べています。将来的には吉野川・紀ノ川流域の自然マップが作れたらいいなと考えています。このコーナーでは、それぞれのしらべ隊でわかったことなどを報告していきます。また、みなさんからの吉野川・紀ノ川情報も載せていく予定です。みなでいっしょに調べましょう。



▲ タマゴケの胞子体(目玉の親父に見えませんか?)



▲ コツボゴケなどが群生しコケ庭になっている蜻蛉の滝公園



▲ シャクナゲの葉上に生育するカビゴケ



▲ 熱帯アジアに広く分布するカタシロゴケ

2008年4月5日に記念すべき吉野川紀の川しらべ隊第1回として、蜻蛉の滝でどんなコケがあるか調べていきました。コケ植物はとも小さいので、観察された場所を地図上に落としていき、今後観察に便利できるようにコケマップとして記録していきました。また、今回はわりと見分けやすい目につく種類にしぼって観察していきました。

当日集まった参加者は6名と少なめでしたが、その分、小さなコケをじっくり観察できました。最初に、木村からコケについての解説を簡単に行いました。一口にコケといってもいろいろあるものです。植物学で言うコケとはコケ植物というグループのことを指します。しかし、日本文化の中にあるコケはそもそも万葉の時代にさかのぼり、「木毛」の当て字であらわされたものが基本にあります。つまり、コケは木の毛のような小さい植物のことをあらわすのであって、これは近代以降に発展した植物分類学とは全く関係ないものです。そういう理由で、分類学で言うコケ植物以外の植物にも、小さいからという理由だけで「コケ」と名

付けられたものがあるのです。例えば種子植物のモウセンゴケ、サギゴケ、シダ植物のウチワゴケ、コウヤクシノブ、クラマゴケ、地衣類のウメノキゴケ、ハナゴケといったものが代表例です。また「鮎の食べるコケ」や「この石にはコケが着いてすべる」、「水槽にコケがいつぱいついて困る」などのコケは藻類、つまり藻の仲間のことです。そんな話からはじまって、コケ植物を構成する3つのグループ、蘚類、苔類、ソノゴケ類についてふれた後、実際にコケを探していき

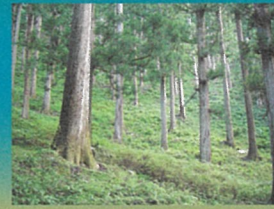
最初に公園入口にあるシダレザクラの樹幹から観察していきます。遠目に見ると1種類に見えるようですが、近くに行くとじっくり観察してみるとほとんど見つかっていきません。まずはこうして種類を見分けるトレーニングからはじめていきました。こうして参加者のみなさんが探してみたところ、コモチャイトゴケ、コダマゴケなどあつという間に5種類のコケが発見できました。その後、入口の石垣周辺を観察しました。ちょうどこの時期にはタマゴケというコケが胞子体を

伸ばすのですが、ここは豊富にあつて、よく観察できました。胞子体とはコケ植物本体から伸びる器官で胞子をつくりまします。ちなみに難しい話をするとシダ植物、種子植物の根・茎・葉・花など私たちが見ている部分はこの胞子体が進化したものです。タマゴケの胞子体は先端の蒴という胞子をつくる部分が目玉の親父のようで楽しく、今回も大人気でした。次いで橋の周りと観察していき、見つけたコケの名前を地図上に記録していきまします。そうするとあつという間にお昼になりました。しかし進んだ距離は入口から10mほどでした。しかしやつと公園の中に入ることができましたので昼食としました。

昼食後は公園の広場を散策しました。蜻蛉の滝公園は春のサクラ、秋の紅葉で知られていますが、地元のみなさんによりよく清掃などの整備がされており、コケがたくさん生える環境が整っています。そのため、京都の西芳寺などに代表されるいわゆる「コケ庭」風になりつつあります。西芳寺などでは雑草などは抜き、コケは抜くのが面倒なので残りますが、そのうちコケだらけにというコケ庭の成立過程があるので、ここでも同じような経過の途中と考えられます。ここでは、主にコツボゴケがコケ庭風にはびこっている様子を観察し、フタバネゼニゴケが侵入してコツボゴケを倒してとても低い制空権を争っている様子などを観察しました。

この後、こうして観察を続けると、広場だけで終わりそうだったので、名残惜しくも滝へ

第6回 源流の主要たち



川上村のギフチョウ

伊藤心くお

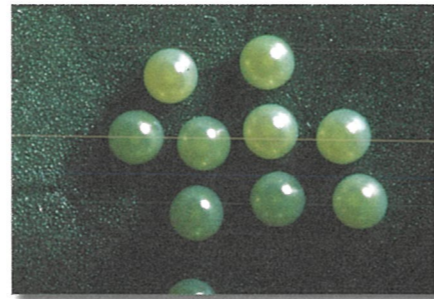
私が、川上村にギフチョウの撮影を兼ねた調査に訪れたのは1980年の5月でした。場所は、川上村上谷。柏木で大きく右へ蛇行する吉野川の本流から支流の上多古川沿いに入り、またその支流を左へと人工林を行くと大きなトチノキに出逢ました。道路脇の陽だまりを見ると小さなシジミチョウがいます。地面にとまって、口吻(口、蝶の場合、吸尿管のこと)を伸ばしています。土の中からミネラル分を吸っているようです。その小さなチョウは、スギタニルリシジミと呼ばれているシジミチョウ科のチョウで、幼虫はトチノキの葉を食べて育ちます。そのため、奈良県ではトチノキのある山岳地帯へ来ないと見られない少し珍しいチョウの一つです。

左へのハヤピンカーブから急な登りになり、暫くすると上谷集落の入り口に着きました。あらかじめ国土地理院 1/2500 の地図で調べた、お墓のある方へ行ってみます。道の左側は綺麗に掃除が行き届いたお墓が並んでいて、その右手は、クリの林になっています。クリの新葉が芽吹いていたかまで記憶は定かではありませんが、その林床を見ると、覚えのある植物の葉が目にとまりました。ミヤコアオイと呼ばれている、ウマノスズクサ科の植物で、辺りをみると30枚ほどの葉がまとまった大きな株が、あちらこちらに繁茂していました。新しく開いた葉を何枚か裏返しながら見ていくと、そこに淡緑白色をした真珠を思わせる、直径1.5mmほどの卵が10卵ほど並んで産み付けてあったのを、30年近く経過した今でもはっきりと覚えています。これが、川上村のギフチョウと私の最初の出会いで、大正時代に残された採集記録以後50年ほど途絶えていた記録の再確認となったのです。その頃の研究者やコレクターの間では、吉野山のギフチョウがいなくなったとか、いや奥の千本でいたとか情報が流れていた時代でした。大阪にある昆虫同好会で、大正時代の上谷の記録を聞き、調べたいと言い出した若い研究者と共に調べに来たのでした。残念ながらこの時は、成虫に出逢うことはありませんでしたが、クリ林から稜線へ登る山道沿いや、稜線にある大迫への道沿いは、いかにもギフチョウが飛び出しそうな環境でした。

ルードルフィア ヤポニカ (*Lueddendorfia japonica*)、学名でそう呼ばれているギフチョウは、日本の本州のみに生息しているアゲハチョウ科のチョウで、岐阜県谷汲村(現揖斐川町)で採集された個体に、ギフチョウの日本名がつけられ、そう呼ばれるようになりました。

里山環境の新炭林から、それに続く林に生息してきたギフチョウは、最近になって生息地の開発や、チョウ採集マニアなどの乱獲で生息数が減少しています。奈良県内の分布は、盆地西側の葛城山系(金剛山から竹の内峠にかけて)の稜線と山麓部分。南部山岳地帯は、吉野から川上村。盆地東側の大和青垣と呼ばれている地域には生息地が点在しています。奈良県のレッドデータブックでは、絶滅危惧種に指定されていて、生息地の葛城山や川上村では、採取禁止を呼びかけて保護をしています。

山桜が咲く頃に現れるギフチョウは、スプリング・エフェメラル(「春の妖精」の意味)と呼ばれ、春



▲ 卵アップ



▲ 1 齢幼虫



▲ 孵化



▲ 蛹

の訪れを告げるチョウです。アゲハチョウ科の中で、一番早く現れ、一年を通じてチョウが見られるのは春だけということからも特別扱いされています。川上村では、4月中旬にチョウが見られます。オスはメスを見つけ交尾をすると、交尾ノウと呼ばれるものを、メスの交尾器につくり、他のオスが交尾できないようにします。交尾を終えたメスは、卵を幼虫が食べる植物の、ミヤコアオイと呼ばれるカンアオイ類の葉の裏側に何卵かまとめて産み付けます。卵は、約2週間後に孵化し、ミヤコアオイの葉を食べて育ち、6月上旬には、地表面の石や植物の根際などで蛹になり、そのまま翌年の春まで過ごします。

ギフチョウの幼虫は、ウマノスズクサ科のカンアオイ類を食べて育ちます。奈良県に生息するギフチョウは、ミヤコアオイとヒメカンアオイの2種類のカンアオイを食べています。生息地それぞれで微妙に翅の模様や色合いが違い、ギフチョウを研究している人は、翅の模様を見ただけで、生息地を言い当てるほどです。

奈良県では、川上村伯母谷に棲むギフチョウが一番南に分布するギフチョウになります。日本では、紀ノ川を下った和歌山県粉川町にある竜門山が南限のギフチョウ生息地とされています。竜門山は、北緯34度14分20秒。伯母谷は、北緯34度15分52秒と僅か数100mほど竜門山が南に位置することが分かります。しかし、最近竜門山のギフチョウは、ゴルフ場やハングライダーの基地に開発されて、すでに絶滅したように聞いています。そうすると、現在も生息を続けている川上村のギフチョウは、日本で一番南に棲むギフチョウになり、学術的にも貴重な生息地と言えるのです。

川上東小学校では、以前校庭にギフチョウの幼虫が食べるカンアオイ類を植栽してギフチョウの観察をしていました。現在、東小学校は廃校になりましたが、校舎南側の斜面に子どもたちが植栽したミヤコアオイで、毎年5月下旬になるとギフチョウの幼虫が観察できます。幼虫が食べるミヤコアオイを植栽しただけで、ギフチョウのメスが飛んできて卵を産んだようです。それから、川上東小学校の裏の花壇は、自然発生したギフチョウの生息地となったようです。私は、ギフチョウのメスが一生でどれほどの卵を産むのか知りませんが、100個産卵するとして、卵の段階でダニなどが捕食し、幼虫時代には肉食昆虫や、両生類や爬虫類やクモ類などに捕食され、無事に親(チョウ)になるのはごくわずかだと考えられます。オス1個体とメス1個体が出逢って交尾。メスが100個の卵を産んだとしたら、オスメスそれぞれ1個体がチョウになればそこに生息するチョウの数は保たれたことになり、生息数は変わらず順当に生息していると判断できるのです。しかし、卵や幼虫の段階で人口的に飼育すれば、ほとんどの卵や幼虫が親のチョウになることができます。それを自然界に放すと、大量の卵を残すことになり、たちまち幼虫の餌不足が起き、自然淘汰されるべき弱い遺伝子をもったものも次世代に受け継がれてしまいます。

その時はたくさんのチョウが飛び、見せかけだけはチョウが増えて良かったとなります。しかし、大量に産まれた卵や幼虫はその分天敵にも狙われやすくなり、弱い遺伝子(現在の環境では生息に不利になる形質を発現する遺伝子)により病気が発生したりして、いつしか元の生息数にもどると考えられます。このような、保護は何の意味も持ちません。できれば、幼虫の食草であるミヤコアオイが多く生育できる環境を整備して、春になると毎年ギフチョウの飛び姿が見られる川上村であってほしいと思います。

ギフチョウの他にも、貴重で重要なチョウが2種類川上村には生息しています。このチョウたちのことは、次の機会があれば書きたいと思います。



▲ ミヤコアオイに産卵された卵



▲ ギフチョウの交尾



▲ スミレで吸蜜するギフチョウ